

金沢大学サテライト・プラザ ミニ講演

日時 平成15年11月15日(土) 午後2時～3時30分

会場 金沢大学サテライト・プラザ 講義室 (金沢市西町教育研修館内)

演題 「いのちの教育」

講師 村井 淳志 (金沢大学教育学部教授)

私は大人の方にお話しする機会があまりありませんが、この中に先生はおられますか。小学校の先生、あとの方は市民の方ですね。学生や現場の先生に話をすることは多いのですが、一般市民の方の前でお話しさせていただくのは、今日が初めてだと思いますので、思い出深い出会いになればいいなと思っています。

私のもともとの専門は社会科です。歴史教育や地理教育をずっとやってきまして、2～3年前の教科書問題のときには随分いろいろなメディアで発言させていただきました。大体は歴史のことをやっていたのですが、一方でこういうことをやっているものですから、村井淳志という名前でも歴史教科書の問題の発言をしている人と、ニワトリを殺して食べる授業をやっている人がいると思われているようですが、実は同一人物です。

どうして歴史教科書の問題をやっている人間がこういうことをやりだしたのかを簡単に述べます。『学力から意味へ』という私の本を紹介していただきましたが、その本の中に、全国の社会科教師たちにもすごく強い影響を与えた、何人かの実践家の先生が出ていらっしゃいます。今でしたら、日本賞を取られたということで南小立野小学校は大騒ぎになっているようですが、金沢の金森(俊朗)先生が全国的に有名な先生です。ずっと昔では、例えば『やまびこ学校』を書かれた無着成恭さんでしょうか。そのように、社会科の教育に関心を持っておられる全国の小学校や中学校の先生だったらだれでも名前を知っている、大きな影響を与えた教育実践家がいらっしゃいます。

具体的な名前を挙げますと、業界以外ではそんなに知られていないので、皆さんもご存じないと思うのですが、安井俊夫さんです。この方は千葉の中学校の先生でしたが、愛知大学の教授にスカウトされて、今は大学の先生です。それから文京区で中学校の先生をされていた本多公栄さんも宮城教育大学の先生にスカウトされて、その後、仙台で亡くなりました。あとは久津見宣子先生や鈴木正気先生、鳥山敏子先生など、学校の先生がたに大きな影響を与えた実践家が全国にいらして、そういう方が実践記録を書かれました。そ

れを多くの教師が読んで、自分の実践の糧にしたり、励まされたりするような関係が日本の教師文化の中にあったのです。私はそういう授業に若いころから非常に感動して、自分自身もそんな仕事をしたいと思い、この道に入ってきました。

ただ、一つだけ少し気になっていたのは、実践記録を見ると非常に感動的なのですが、実際にその授業を受けた子供たちは本当にどう思っているのかということです。教員仲間は、その先生方の実践記録の本を読んで、すごく感動するのです。僕も本当に感動しました。しかし、実際にその授業を受けた子供たちは同じように感動しているのかどうかというのは、ちょっと分からないぞという気持ちがあったのです。どうしてそんな気持ちになったのかということを出すと長くなるので、簡単におきます。

僕は、小学生の時は大変不安定な子供でしたから、学校の先生とあまりうまくいかなかったのです。ところが3・4年生のときの担任の先生は、本当に『二十四の瞳』の大石先生のような先生で、ものすごく救われました。その先生は愛知教育大学を出たばかりの先生で、授業の力量や子供に学力をつけるとか、テクニックの面では多分そんなに上手ではなかったと思います。今、その先生の授業について覚えているかといったら、あまり覚えていません。ただ、例えば家庭訪問のときに学校からみんなで歩いて帰ります。当時、家庭訪問というのは、ある方面に行くというと、先生が子供たちを10人ぐらい連れて、みんなで手をつないで一緒に学校を出るわけです。それで最初の子は家庭訪問が終わると、そのまま帰宅しますから、「バイバイ」と言って一人減ります。家庭訪問を繰り返していくとだんだん数が減っていくわけです。僕はその学区の中でいちばん遠くに住んでいたものですから、最後は先生と二人きりになれるというのが学校を出たときから分かっていたのです。その先生と最後に2人で手をつないで、最後から2番めの子供と僕の家まで、わずか30メートルぐらい歩いたときの風景とか、そういうのはすごくよく覚えています。

ところが小学校5・6年生のときの担任の先生は、いつものことですがけれども、うまくいきませんでした。僕は名古屋の出身ですが、そのときの担任の先生は、愛知県では図書館における読書指導と美術の指導でとても有名な先生でした。だから僕らのクラスにはしょっちゅう、ほかの学校から見学の先生が見えていました。僕は子供心に、「どうしてこの先生の授業をあなたたちは見に来るの？」「3・4年生のときの先生の授業を見に来るのだったら分かるけど、この先生をなぜ見に来るの？」とすごく不思議だったのです。

その不思議な気持ちを大人になって整理してみると、要するに、教員仲間の評価とその授業を受けた子供による評価では、教育実践に対する評価が全く食い違うことがありうる

というすごく当たり前のことなのです。その体験があるものですから、業界の中ですごく支持されていて、僕も教育実践を読めば素直に感動できるような先生がたの授業も、それを受けた子供たちは本当のところどうなっているのだろうかと気になってしょうがなかったのです。

それでとうとう金沢大学に来たころ、その先生に「先生、私は先生の授業を分析したい。実は教員仲間の評価と子供の評価が食い違うことがありうるのではないかという仮説を持っているので、ぜひ教え子を紹介してください」と申し出ました。「今でも先生に年賀状を送ってきている元教え子だけでいいですから紹介してください」と言って、10人ぐらいの教え子を紹介していただきました。その方々は全国各地に住んでいます。倉敷に住んでいる方もいました。山形に住んでいる方もいました。そういう方のところに「実は何々先生から紹介を受けて、あなたのお話を聞きたいのですが、インタビューさせてくれませんか」と手紙を送りました。そして山形へ行ってはインタビューをし、倉敷に行ってもインタビューをし、そのようにインタビューを繰り返して、その先生に関するインタビューがずっと積み上がってきたところで、もとの授業の分析をするという論文をずっと書いてきたわけです。要するに、受けた側がどう受け止めたかという主観的な部分を、教育実践の分析に持ち込もうとしているというようなことです。

このように教え子からの聞き取りをずっとしてきて思ったのは、歴史教育というものに対して、かつてほど子供たちが関心を持ってこなくなったということです。子供たちは、社会の仕組みや社会がどういうメカニズムで動いているかとか、今後社会がどうなっていくかということに全く関心がないわけではありません。しかし、かつての子供のように、ストレートに関心を持っていないなということです。10人ぐらいの先生について、それぞれ5人～10人ぐらい聞き取りをしましたから、著名な教育実践を受けた子供たち、通算70～80人のインタビューしてきたと思うのですが、そのインタビューから感じたことは、かつてほど、歴史にあまり興味を持っていないということです。

それは当然だと思います。皆さん方は、今の高校で教えられている、例えば山川出版から出ている日本史の教科書などをお読みになったことありますか。日本史叙述のポイントは、農業生産力がどのようにして高まったのか、農民が土地に対する支配権をどう強めてきたかということです。それが古代、中世、近代にわたって書かれていて、メインになっています。皆さん方の中にも1950年代に子供だったという方が多分いらっしゃると思うのですが、直接土地を耕作している農民がその土地に対する支配権をどんどん強めていく歴

史、いろいろ工夫して農業生産力を高めていく歴史は、1950年代の子供にとってはわくわくするような歴史だったと思います。自分たちも多くは小作人のせがれであり娘ですから、そういう人たちにとってみれば、直接田を耕し働いている農民がその土地に対する支配権をどんどん強めていく歴史というのは、ものすごく勇気づけられる、わくわくするような歴史だったと思います。

今の子供にそういう歴史を教えて、わくわくするでしょうか。勇気づけられるでしょうか。多分しないと思います。本当に一流の歴史学者は、そういうことを分かっていますが、土地や荘園に関する歴史学の論文はすごく多いので、それを反映して、山川の教科書ではそういう農業生産力の歴史がすごく詳しく書かれています。

実をいうと、農業や土地に関する歴史学者の論文が多いというのは、昔はそれが大事だからという要素がありましたが、でも大事だからという理由だけではないのです。土地に関しては資料がたくさん残っているのです。なぜ資料がたくさん残っているかということ、農民というのは、江戸時代もそうですし戦国時代もそうですが、代官所に訴えて裁判をたくさん起こしています。境界争いをしょっちゅうやっていたのです。そして、判決が出ると、「隣の境界争いで裁判を起こして、今回こういう判決が出た」というのを子供や孫にちゃんと残しておきたいと思います。だから文書をたくさん蔵に残しているのです。日本全国で豪農といわれる大きな規模のお百姓さんの土蔵を開ければ、そういう土地関係の書類がたくさん出てきます。ですから、歴史学者にとって論文が書きやすいのです。別にそれが現代を生きる日本人にとって大切かどうかという物差しではなくて、資料がたくさん残っているから論文が書きやすい、だから論文がたくさん生産されるというわけです。

このような理由で、歴史学者は土地に関する研究論文をたくさん残していますが、それは現代を生きる生活者や子供たちにとって、はっきりいえばどうでもいいことです。優れた歴史学者は、江戸時代の家族の歴史などを調べています。例えば、江戸時代の夫婦は平均で何年間ぐらい夫婦だったのだろうかということ、驚くほど短いのです。我々は夫婦ということ、共に白髪が生えるまで50年ぐらい一緒に暮らすのは当たり前だと思っていますが、そんなのはつい最近、本当にここ20年か30年のことです。江戸時代の平均はたしか13年ぐらいです。もちろん離縁もありますし、死別もありますし、結婚してもせいぜい10年とか20年ぐらいしか一緒に暮らさないのが平均だったのです。

あるいは、例えば、江戸時代にある人が死んだときに、多くの人たちはどう振る舞ったか。死を前にしたときに、その人はどのように振る舞ったのか、そういう家族の問題、命

の問題、セクシュアリティの問題は江戸時代ではどうなったのか、戦国時代ではどうなっていたのか、この間はどうなっていたのか、というようなことを研究論文として出しています。それは現代を生きる我々にとってすごく関心のあるところです。

ところが教科書にはそれは全然反映されていないのです。一流の研究者は、今の生活者や子供たちが、生産力の発達や生産関係の変化などよりも、家族の問題、性の問題、セクシュアリティの問題、死の問題のようなことにもっと関心を持っているということを敏感に感じ取って、優れた作品をたくさん作っています。ところが、教科書と教師は遅れています。教科書は相変わらず、30年とか40年前の子供たちだったらわくわくどきどきしたような土地制度史が中心の教科書なのです。

私はそのようなことをずっと感じていて、命の問題をもっと学校教育で取り上げる必要があるのではないのかと思うようになりました。

NHK放送世論調査所というところが、1950年代ぐらいからずっと5年に1回、全く同じ質問項目で、質問のしかたも一字一句変えないで調査しています。日本の世論調査はほとんどがものすごくいいかげんで信用できないのですが、このNHK放送世論調査所の定点観測的な世論調査は信用でき、変化を見ることができます。変化が大事です。30%を超える人がいるとって、その数字が多いか少ないかなどというのは議論しても意味がありません。でも、5年前に比べて増えているのか、減っているのか、これはすごく意味があります。

そのNHK放送世論調査所の5年に1度の調査で面白い項目があります。例えば「あなたは去年1年間、神社・仏閣にお参りに一回でも行きましたか」「あなたは常日ごろ、お守りを身につけていますか」「あなたは霊の存在を信じますか」というような質問があるのです。この質問に「イエス」と答えた20代以下の人は、戦後ずっと減り続けたのです。1973年の調査がいちばん底だったのです。ところが、78年の調査ではイエスが増えだしたのです。数としてはまだそれほど大きくはありません。せいぜい10%とかそんなものですが、そこからどんどん増えているのです。一時期はもう10%を割るかというところまでずっと戦後一貫して減り続けた「イエス」が、70年代後半から一気に増えだしたのです。この項目は広い意味で「宗教」とくくられています。子供たちが死の問題に対して、命の問題に対して、すごく関心を持ち始めた証拠ではないかと思うのです。

ところが学校教育というのは本当に頭が堅いですから、そういう問題を一切取り上げようとしません。教科書にもありません。小学校と中学校のカリキュラムに、死の問題を積

極的に扱う単元はありません。だから関心が放置されたままです。

子供が死の問題について関心を持ったときの小説というのが幾つかあります。例えば山田詠美という人が『晩年の子供』という面白い短編小説を書いています。これは、変な勘違いで自分はもうすぐ死ぬと信じ込んでしまった少女が周りの大人に、「お父さん、死んだらどうなるの。私は実はもうあと半年ぐらいしか生きられないの」とか、いろいろなことを言うのですが、大人は「何を言ってるんだ、そんなの考え過ぎだよ」「ワハハハハ、小学校4年生でもう死生観に関心を持ったのか。うちの娘は大したもんだ」とか、そういうリアクションばかりで、まともに取り合ってくれないという世界を描いた面白い小説ですが、死の問題、命の問題に真剣に興味を持ちだした多くの子供たちはそういう目に遭っていると思います。周りの大人はだれもまともに答えてくれないわけです。

人間が死んで、それはもう二度と生き返ることがない不可逆的な変化だということは、小学校3年生ぐらいで大体分かります。小学校3年生ぐらいで初めてその問題に直面して、もちろん悩まない子供もいますけれども、悩む子供はすごく悩みます。僕は金沢医科大学附属看護学校と国立金沢病院附属看護学校で、今、教育学の非常勤講師をしているのですが、その話をすると、「私も小学校3年生のときに、何日も何日も眠れなくて、いつも死んだらどうなるか悩んでいた」という学生がいます。

大阪の大学生と女子高校生のカップルが殺傷事件を起こして、「人を殺してみたかった」というようなことを言ったと報道されて、すごくショッキングでした。それから、オウムの元信者の中に、こういうことを言っている人がいます。これは、一端、劇薬物取締法違反で逮捕されて刑務所に入って、出てきたらまた富士宮に戻ってしまった人なのですが、「要するに死の問題を克服したいんだ。あなたがたはオウムのことをばかにしているけれども、あなただって死が怖いだろう。あなたはどういうふうにその問題を処理しているのか。考えないようにしてごまかしているだけじゃないですか。我々信者たちはその問題に真剣に向き合って、何とか克服しようと努力しているのですから放っておいてください」というようなことを新聞記者に言っています。

実際に人を殺してみたかったというような形で暴発したり、命の問題、子供たちの命に対する関心が放ったらかしにされているということが、むしろ非常に異常な事件を引き起こす背景の一つになっているのではないかと考えているのです。そういう事件が起こると、必ず言われるのは「これから命の大切さを教えていきたいと思った」ということです。長崎の事件でも神戸の事件でもそうです。犯人の中学生が在籍していた中学校の校長先生は

「命の大切さを教えていきたい」というようなことをおっしゃっていました。

しかし、命の大切さというのは本当に教えられるのでしょうか。私たちは、本当に命が大切だと思っていますか。皆さん、自分の命は大切だと思っていますね。自分の家族の命は大切だと思っています。自分の知り合い、友達、名前の分かる人、みんなその人たちの命は大切だと本気で思っているらっしゃるでしょう。だけど、会ったこともない人の命を本当に大切だと思っていますか。日本人でない人たちの命を本当に大切だと思っていますか。人間以外の生き物の命を本当に大切だと思っていますか。そんなことを思っていたら身がもたないです。

日本で今、自殺で何人亡くなっているかご存じですか。3万人です。この3万人という数字は異常です。人口10万人当たりの自殺者数は、日本は先進工業国中トップレベルです。東アジア諸国、中国、韓国、台湾、シンガポールというASEAN諸国と比べてもかなり高い。ちなみに世界一ではありません。世界一はハンガリーかどこかです。なぜハンガリーの人がそんなに自殺をするのか僕はよく分かりませんが、先進工業国というくくりと東アジアというくくりで見たとき、日本は人口10万人当たりの自殺率が高いのです。交通事故でも8000人死んでいますから、交通事故と自殺で合わせて4万人近くが死んでいます。その人たちの命が本当に大切だと思っていたら、それは身がもちません。

全世界では、何分に1人の割合で子供たちが死んでいます。生まれてこのかた、毎日5時間水桶を持って水をくみに往復するだけで、10歳でエイズで死んだという子供が何十万、何百万といます。道路を1本通せば、そのアスファルトの下にもものすごい数の地中生物の死骸があります。里山に行って土をスプーン一杯すくうと、そこに10万匹の微生物が住んでいると金森さんがよく教えてくれるのですが、電子顕微鏡で見ると、本当にうじゃうじゃと生き物がいます。アスファルトを1本通したら、みんな死にます。真夏にぜひ金沢大学の角間キャンパスにいらしてください。アスファルトの上にもものすごい数のミミズの死骸があります。大学があんなアスファルトにしなければ、平和に生きていたすごい数のミミズたちが、アスファルトを作ったがために息ができなくて外へ出てきて、アスファルトの上でチリチリと焼け死んでいきました。それをいちいち、自分の家族が死んだときのように胸を痛めていたら身がもちません。

我々は、「私の命」「私の家族の命」「私の友達の命」のことは切実に大切に思っているのですが、命一般を大切だとはやはり思っていないと考えたほうがいいのではないのでしょうか。だれも命一般を大切だと思っていないのに、命の大切さを教えたいというのはやはり

陳腐です。そういうことを知らないで言っているとしたら陳腐だし、知っていて言っているとしたら偽善です。ですから、僕は命の大切さを教えるなんてことはできないと思います。

それでは何ができるのか。できることは、今の子供たちが死ということから、非常に、極端に、過度に遠ざけられている状態を解除することではないかと思っています。つまり、かつての子供たち、昭和33年生まれの僕でさえ、身の回りに死というものがたくさんありました。例えば、僕の母親は昭和4年（1929年）生まれですが、子供のときに法定伝染病を3回やっています。腸チフス1回とジフテリア2回です。これは戦前の子供はものすごくよくかかって、死亡率も高い病気でした。その話を聞くと、「母親が子供のときにジフテリアでそのまま死んでいたら、おれはいなかったな、存在しなかったな」と当然思うわけです。つまり自分の存在感というものに対して深刻な揺さぶりをかけられるわけです。

僕が生まれる3年前に男の子を一人出産しているのですが、生後30分で亡くなりました。母親に話を聞いてみると、太ももが2倍以上の太さに腫れ上がったと言っていますから、明らかに妊娠中毒症です。昔は本当に多かったのです。生後24時間生きてると名前をつけるのですが、生後30分で死んで、名前もつけられず葬られた、3年前に生まれたその子と自分は、入れ代わっていても別に全然おかしくないわけです。たまたま3年前に生まれた子供は死に、3年後に生まれた僕は生き残ったというのは、本当に偶然にすぎないわけで、そういうことを考えると不思議な気持ちになります。

昔は、保健所や市役所の公衆衛生課と称するセクションが犬猫の死体を回収するシステムというのがまだありませんでしたから、犬猫の死体は何日も何日も放置されていました。そうすると、子供はそういうのが好きですから、例えば川原で犬の死骸があると、毎日見に来るのです。今日はどうなっているだろうと学校の帰りに必ず見について、生き物の命が失われるとこんなふうに変わっていくのだと思うわけです。ちょうど平安時代に「不浄観」といって、死体をずっと見つめて悟りを開くという仏教の修行があったそうです。谷崎潤一郎の『少将滋幹の母』に出てきます。それではありませんが、我々の命もいったん失われたら、こんな変化が起きていく要素が体の中にビルトインされているのだということも昔の子供たちは学習していると思うのです。

千葉県松戸市のあるアイデア市長が、「すぐやる課」というのを1960年代に作ったのを覚えていますか。「すぐやる課」の依頼でいちばん多かったのは死骸の処理だそうです。「何とかしてくれ」と言われると、すぐ飛んでいってやる。今は公衆衛生課ができました。

金沢市にも公衆衛生課があって、「犬の死体がありますよ」というとすぐ飛んできます。朝見て夕方もう一回見るということはまずないです。この間、金沢市の公衆衛生課に聞いたら、1年間で4000匹ぐらいの犬猫の死骸を処理しているそうです。道端に犬や猫の死骸があると、例えば保育園や幼稚園にお子さんを行かせている今の親は大体「見ちゃだめ」と言います。子供に死体を見せないのです。校務士さんが学校に来ていちばん最初にする仕事は、学校で飼っている小動物が死んでいないか見回ることだそうです。死んでいたら、子供が登校する前にパッと処理する。見せないわけです。

かつては死というのが非常に単純でしたから、自分が死ぬときは、死ぬ人自身が分かるわけです。自分がもうすぐ死ぬということが分かっていて、もう長くないなと思ったら、家族を順繰りに呼んで、「おれはもうすぐ死ぬけど、この際おまえに言っておきたいことがあるんだ」というようなことを必ず言ったと思います。今は医療が非常に高度化して複雑になっていますから、自分がいつ死ぬか、自分ではなかなか分からないです。そうすると、「もうすぐおれは死ぬけれども、この際、孫であるおまえに言っておきたいことがあるんだ」と言うタイミングがなかなか難しいです。言えないです。

自宅で亡くなる人よりも、病院で亡くなる人の数が上回ったのが1962年（昭和37年）です。昭和37年の段階で、日本中の半分の人が自宅で死に、半分の人が病院で死んでいました。今、自宅で死ぬのは難しいです。自宅で死んだら大変です。警察が来ますし、検死して大騒ぎになります。家族は大変です。ご近所の方が「何かあそこでおじいちゃんが亡くなったけど、パトカーが来て、いっぱい鑑識の人が来て調べていたわよ。何かあったんじゃないの。毒でも盛られたんじゃないの」という話になります。自宅で死ぬためには、ちゃんとホームドクターを持っていて、必ず死亡診断書を書いていただくお医者様をあらかじめ決めておいて、そのかたに少なくとも月1回は往診していただく。「私が死んだら必ず死亡診断書を書いてくださいよ」というお医者様と長期契約をしておかないといけないのです。そうしておけば、その人が死亡診断書を書いてくれますから大丈夫です。そうしないと、警察の監察医が死亡診断書を書くことになりますから、一とおり調べなければいけなくなり、家族は大変な思いをするわけです。そんなことだったらもう病院に行こうかという話になります。

今日の話題にしようと思っっているのですが、ニワトリなどを都市部でもたくさん飼ってましたから、卵を産まなくなったら屠殺して、みんなで食べるということをやっていました。子供に見せる場合もあったし、見せない場合もあったかもしれません。見せないと

しても、卵を産み終わったニワトリは人間に食べられるものだ、そのために飼われているのだということは、子供を含めてみんな家族全体の共通の了解事項だったと思うのです。ところが、今は絶対そういうことを子供たちに見せようとしません。

僕が「ニワトリを殺して食べる授業をやっている」と言うと、みんなギョッとしますが、何十羽ものニワトリの命を食べてきたのですから、そのニワトリがどんなふうになくなっていくかということを一回自分の目で見て、そのことを思い出して、感謝の気持ちを思い起こしながら食べるという程度のことは、子供にやってもいいのではないかと考えています。

実は、そもそも統計にカウントされないニワトリの命もあります。これは養鶏用として孵化させられたヒヨコです。おしりの穴でオスカメスカをパッと1秒以下で鑑別する技術は日本がトップクラスだという話を聞いたことがあります。メスは卵を産むために2年半飼われます。1歩も動けないで、ゲージの中でただ食事をして卵を産み続けるだけですが、2年半生きられます。オスと判断されたヒヨコはどうなるでしょう。

この辺のオスのヒヨコはいろいろあるらしいのですが、大口としては、いしかわ動物園が1羽20円で買い取るそうです。動物を生餌にするわけです。タヌキやキツネの生餌です。タヌキ、キツネのような肉食動物は、屠殺した肉、要するにお肉やさんで売っている肉ばかり食べさせると、必ず病気になるのです。必ず生きた状態でえさをやらなければいけないのです。「いしかわ動物園に行ったとき、そんなの見たことないぞ」というかたがいたら、それはそうです。夜、お客さんが帰ってからやるのです。お客さんが帰って門を閉めてから、大きな庭から小さなおりに戻すとき、生餌を使って誘導したりするのに使うらしいのです。

いしかわ動物園の飼育課長は桐原さんという女性の獣医さんです。この人は面白い人です。桐原さんはときどき講演をやってらっしゃいますから、機会があったら、ぜひ伺うといいです。桐原さんはサニーランドのころから飼育課長だったのですが、いろいろ面白い企画を考えていらっしゃいます。桐原さんの考えた企画で僕がいちばんヒットだったと思うのは、夜の動物園探検です。これは夏休み中に子供たちを集めて、夜の動物園はどうなっているか観察する企画です。

そのときに、やはり生餌をやるというのをやったらいいです。サニーランドのときに「世界の爬虫類」というので蛇をたくさん飼っていた時期があったらしくて、でかいニシキヘ

ビにニワトリを食べさせるというのを子供たちに見せたそうです。ニワトリを放したら蛇はパクッと食べます。引率のお母さんたちからは「キャー、残酷」という声が出るわけですよ。そうすると桐原さんがすぐに、「今、お母さんから残酷ってお話が出ましたけれども、ニシキヘビは1年間に何羽ぐらいのニワトリを食べると思いますか」と聞かれるわけです。ニシキヘビの体重は人間の2倍から3倍ぐらいあるようですが、びっくりしたことに、4羽です。ニシキヘビは一回パクッとやったあと、3か月間じっと動かないのだそうです。だから「人間のほうがよっぽど残酷でしょう」などとおっしゃるのだそうです。桐原さんはとにかく豪傑で面白い人です。僕は一回お話ししただけですけども、命の教育という形で講演されているそうなので、学校でもお呼びになったらいいと思います。なかなか話も上手な方です。

いろいろな例を述べましたが、簡単にいうと、人間の死というものから切り離されている。だから人間の死の場面を見ることもないし、自分が死ぬという可能性について真剣に考えることもない。それ自体は、社会がよくなった証拠です。子供がばたばた死ななくてよくなった。親も死ななくてよくなった。戦争もなくなった。病気もなくなった。交通事故はありますけれども、それでも結核もなくなったし、いいことです。

ただ、ありとあらゆる社会変化というのは、どんなによい変化でも必ず副作用があるのです。僕が思うに、人間の死が消滅したというのは確かに社会の進歩ですが、それによって子供たちが自分の人生や、自分の命や、自分の死についてまじめに考えるチャンスが少なくなったというのは重大な副作用だと思います。だからそれを学校教育で再建してやればいいのだと思っています。人間の死と、人間以外の生き物の死、この二つから今の子供たちが過度に遠ざけられている状態を解除してやる。かつてあった、人間の死を間近で見て、自分の人生や人間の命、自分の死というものに関して真剣に考えるというチャンスを教育的に、意図的に再建してやればいいと思うのです。

具体的にどうすればいいのか。人間の死といっても、別に死骸を見せるというわけではありません。『バカの壁』という本を書いた養老孟司さんという東大の解剖学の先生が、死体の展示というのを全国でやっているらしいのですが、あの人もおもしろい人ですね。あの人の書いた本で一番面白いのは『解剖学教室へようこそ』です。これは面白い、いい本です。江戸時代に初めて解剖をした山脇東洋でしたか、解体新書の著者たちよりもだいぶ前にすでに第1号がいるのですが、そういった人たちのことや、お医者になるために必ず医学部の学生さんは2年生のときに解剖実習をやるのですが、そのようすなど、なかなか

面白いです。ちくまプリマーブックスというところから出ている『解剖学教室へようこそ』です。興味のあるかたはぜひ読んでいただきたいと思います。

僕は死骸を見せるなんて、そんな極端なことはしません。どうするかというと、死に近い人と子供たちとの出会いを作り出せばいいのではないかと思います。死に近い人と子供たちが出会えるチャンスを作るのです。

死に近い人とはどんな人か。一つは末期の患者の方です。これは、がんとかさまざまな病気で、現代の医学の水準でも自分はあと半年とか1年で亡くなるということがはっきり分かっている人です。自分はもうすぐこの世から消滅するけれども、子供たちにこういうメッセージを残しておきたいと考えられる末期患者のかたは、そう数は多くないかもしれませんが、無視できない比率でいらっしゃると思います。特に、教壇に立った経験のある方で、比較的年齢の若い方は、そういうメッセージを強く残したいと思うことがしばしばあります。

西インター通りにある済生会金沢病院の東3階の病棟に、緩和ケア病棟というホスピスの病棟があります。話は違いますが、ホスピスの見学はぜひされたほうがいいと思います。いいところです。僕も末期がんだっただけで入院したいと思いました。友達が来た泊まれるスペースや家族が手料理を作ってあげられる調理施設があります。眺めもいいですし、看護婦さんは普通は8人に1人ですけれども、2.5人に1人だったか、すごく充実しています。痛みを取ってくれて普通どおりの生活ができて、本当にいいです。

最近はやや稼働率が高くなってきたらしいのですが、僕が初めて見学に行ったときはがらがらでした。「こんなにいい施設なのにどうしてがらがらなの、もったいない」と思いましたけれども、婦長さんに伺ったところ、このホスピスは、自分が末期であるということちゃんと告知を受けた方でないとお断りしているのだとおっしゃっていました。

やはり県内の告知率は低いらしいです。「もし自分ががんになったら告知してほしいか」と質問されたら、日本人は80%ぐらいの人がイエスと答えるのです。ではどうしてそんなに告知率が低いかというと、「自分の配偶者が末期がんになったら告知しますか」という質問は40%にガクンと落ちるのです。少しずつ改善はされてきているようですが、僕が最初にホスピスにおじゃました7~8年前はまだそんな感じだと婦長さんがおっしゃっていました。

この済生会石川病院の緩和ケア病棟は見学ウェルカムですから、事前に婦長さんに電話をして、見学者の名簿をファックスで送れば歓迎してくれます。ボランティアも受けつけ

ているようです。クリスマス会など、ホスピスでは必ず毎月季節の行事をするのですが、そのときに手伝ってくれるボランティアを募集しているようですから、行かれるとなかなか面白いのではないかと思います。

さて、僕が最初にそのホスピス病棟に行ったときに、44歳で金沢市内の現役の小学校の女の先生で、末期の乳がんの患者のかたが亡くなられた直後だったんです。済生会病院に入院されてからずっと、担任の子供たち一人一人に渡す手作りの贈り物を作って、作り終わって亡くなられたそうです。そのような方は体調のよいときに「講演をお願いします」と言ったら絶対来てくれたと思います。子供たちに最後のメッセージを、命の授業をしてくださいとお願いすればやってくれたと思うのです。僕が最初に行ったときは、その方が亡くなられて1か月ぐらいだったので、婦長さんが「あの先生だったら絶対にお引き受けになったのにね。もう2か月早かったら」とおっしゃっていました。

そういう末期の患者の方、それから九死に一生を得た人、いろいろな意味でもしかしたら死んでいたかもしれないという強烈な体験をお持ちのかたに、子供たちにいろいろ語っていただく。

前の石川県被団協(日本原水爆被害者団体協議会)の役員をされていた岩佐幹三先生は、金沢大学の法学部長をされた方で、退官されたあと、東京で原水爆運動に専念したいということで被団協の活動をずっとされていますが、このかたは被爆当時、本当に「はだしのゲン」状態だったのです。「はだしのゲン」という漫画をお読みになったかたも多いと思うのですが、自分は庭にいて被爆しました。家がつぶれて、お母さんが下半身をつぶれた家に挟まれてしまったのです。助け出そうと思っているのだけれども、30分もしないうちにわっと火が回ってきたので、お母さんが「もう逃げなさい」と言うのです。「南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏」とお母さんが念仏を唱え始めて、その念仏の声を後ろで聞きながら逃げざるを得なかったわけです。それで岩佐先生は、とにかく、自分はそのとき母親と一緒に死ぬべきではなかったのか、自分はお母さんを見殺しにしたのではないかという罪の意識を感じて戦後を生きてこられたのです。そういう話を金森俊郎さんが十一屋小学校の子供たちにしてくれました。

話ばかりしていると退屈なので、1本ビデオをごらんいただきたいと思います。泉澤美枝子さんという1991年に亡くなられた末期の患者のかたです。このかたは乳がんが全身に転移して、もう末期だという判断をされていました。金沢にホスピスがないのは、金沢の街が病気の人に冷たい証拠ではないのかということで、金沢にホスピスを設立する市民運

動をしていっしょにいました。そのプロセスで石川テレビが取材し、その石川テレビのプロデューサーが仲立ちして、当時、扇台小学校の子供たちに、「私はもう末期がんでもうすぐ死ぬけれども、ホスピスを作る運動をやっているんだ」ということを話してくださいました。その扇台小学校の4年生に話をした1年後に亡くなられたのです。済生会病院にホスピスができたのは、泉澤さんが亡くなって3年めでした。泉澤さんが亡くなったときの石川テレビのニュース番組を流します。

ビデオ上映

(アナウンサー) スーパータイムで進行性がんと戦い続けていた泉澤美枝子さんをこれまで何度か紹介しましたが、泉澤さんは今月17日に亡くなりました。泉澤さんは限られた生の中でがん患者のカウンセリングをしたり、また「がん告知と末期医療を考える会」の代表を務めたりして、現代医療の前に横たわるがん告知や、終末期の医療の問題に積極的に取り組んできました。今日は泉澤さんの軌跡を追ってみます。

(ナレーション) 私たちが初めて泉澤美枝子さんに会ったのは4年前です。昭和59年に泉澤さんは1回めの乳がんの手術を受けていましたが、がんはすでに両肺や骨にも転移し、通院しながら闘病生活を送っていました。

がんの進行がどんなに深刻でも、真実を包み隠さず知らせてほしいという泉澤さんの強い願いで、病状はすべて知らされました。医師と患者が真に向き合った形でなければ、本当の治療はできないと考えたのです。病気であっても、これまでどおり、自分なりの人生を生き抜いていきたいという強い意思の現れでした。

1回めの手術を受けた直後、泉澤さんは1冊の本を出版していました。『どこかでお会いしましたね』。がんを真正面から見据えた闘病記録です。12年前、乳がんを自覚した直後、当時6歳の一人息子を別れた夫に託し、泉澤さんは金沢市内で一人暮らしをしていました。

一人暮らしの泉澤さんにとって、映画は恋人でした。どんなに体調が悪くても、週に1回は映画館に足を運ぶというほどの映画ファンでした。病気の人への介護の仕事をして、その合間を縫って、スクリーンにさまざまな夢を見て、人生を味わう。それを映画評として発表するのは泉澤さんの大切な仕事であり、生きがいでもありました。

一方で精力的に講演活動を行いました。末期がん患者の多くは多忙な一般病院の中で孤独な死を迎えなければならない現実に疑問を投げかけていたのです。そして、去年の8月、泉澤さんの呼びかけで、県内に「がん告知と末期医療を考える会」を設立しました。患者と家族、医療関係者らが手を取り合い、人間らしい生と死について考えていこうというものです。

(泉澤) とても生きていてよかったな、生きることは素晴らしいことだなと感じています。こういう会を通して考えるということに、がん患者の方が、私のところに個人的な悩みじゃなくて、この席上に一緒に来て、一緒に皆さんと考えていけるようになったらなというふうに考えています。

(ナレーション) 去年はがんの転移から手術を受け、入退院を繰り返しましたが、病院から講演先へ出掛けることもしばしばでした。去年の7月には金沢市内の扇台小学校へ出掛け、生と死をテーマにした授業で子供たちに語りかけました。

(泉澤) どうやって生きていくかということ、どうやって死を迎えていくかということは、やはり生まれたときから死ぬまでの間にどういう生き方をしていたかということが大事じゃないかなと思うの。それにはこういうふうに学んだり、何しろ人と交わったりすることね、そういうことできっと何かすることがむだにはならないと思うのね。

(金森俊朗) たくさんのものをいろんな人たちに与えている。その与えられていた人たちが彼女を支えているのだなという、同じ優しさの分だけ、人間それぞれみんな優しくなっちゃって、あの人に関わっているんだなあ、だから、そういうふうに強く生きられるのかなと思いますね。

(泉澤) そういう弱いものを切り捨てていく日本の社会的な構造ですか、そういうのが病気以上につらくて悲しいということですね。その辺が、だから私は自分で何かして働いたり、正面に、講演とかそういうのでみんなの前にこの姿をさらすことによって、がん患者でもこういうこともできるんですよということ、がん患者自身にも、あるいは周りの人間にも、そういうことに関して知らせて、知ってほしいなと思ったんです。

(ナレーション) 自らもがん患者である小松市の今川透さんは、去年、泉澤さんと出会いました。お互いに励まし、共鳴し合う中で、「がん告知と末期医療を考える会」を誕生させたのです。

(今川) ああいう状況でありながらも、病気で寝ている、より余裕のない人だったらベッドを訪ねて、一晩中話し相手になってあげたり、体をさすったり、そういうことを献身的にやっておられる、そういうすさまじいばかりの生きざまに感動したわけです。この人は自分の生涯の友して、互いに命を尽くすまで、共通の問題、政治の問題、命の問題を語っていききたいと。

(ナレーション) 今年の2月、頸椎に転移したがんがもとで歩行困難になった泉澤さんは、集中して治療を受けるために入院生活を送ることになりました。歩けなくても私はまだ書ける。新たな挑戦は2冊めの本を出版することでした。小学校での子供たちとの出会いが心に広がり、生と死について語った授業がテーマになりました。

(泉澤) 毎日を生きる、生きる、生きるということを本当に考えて、どうやって生きるのか、どうやって今の状態を生きていくのか。死ってというのは、そういう意味では全然考えていません。

(ナレーション) 原稿を書き終えてからの泉澤さんの容態は次第に悪くなっていきました。7月の終わり、ようやく本が完成し、一刻も早く本を見せたいという友人らが病院に駆けつけました。本のタイトルは子供たちが歌った『わっしょい、わっしょい』です。

原稿の最後の段階では、手が思うように動かず、看護婦さんに口述筆記をしてもらって仕上げた本です。いろいろな思いが一度に泉澤さんを襲ったようでした。

本の一節にこう書いてあります。

結局、価値観とは、人が生きていくすべてを支える根っこであり、病気になったときに、これまでの生き方が最大限に生きてくる。自分の生き方に責任を持って生きてきた人、他人に甘えず自立していた人、こういう人が病気になったとき、悲しみの向こうに、それと同じ、いや、それ以上の幸せを見つけることができる。私のがんになってよかったと感謝

するのは、弱者の痛みが分かり、充実した生き方を見つけたからです。

本の完成を待っていたかのように、今月 17 日、泉澤さんは静かに 51 歳の命を閉じました。限られた命を全力疾走してきた泉澤さんが最後に残したメッセージは『わっしょい、わっしょい』。生きることへの尽きせぬ思いが込められています。

(アナウンサー) 死よりも、生かされている今をどう生きようかということを考えていたという泉澤さん、限られた生を積極的に生きられたその姿は、私たちに生きるということをお教えてくださった気がしますね。

(アナウンサー) 泉澤さんの本当に長くてつらい戦いが今、静かに終えられたという感じなのですが、私たちに本当にたくさんのお話を残してくださったと思います。泉澤さんのご冥福を心からお祈りいたします。

ビデオ終了

今、流していたニュース番組が 91 年ですから、今から 12 年も前です。そのとき 51 歳で亡くなりましたから、生きておられたら泉澤さんは 63 歳になられているわけです。

こういう形で末期のがん患者のかたに小学校の教室に来ていただくという授業は、恐らく日本の公立小学校では初めての試みではないかと思って、金森さんに「絶対これは本にしる」と言っていたのですが、彼もまだ自分の教育実践のキーワードが「命」だということに、まだあまり気づいていなかったということもあるし、それこそ教員仲間にこういう授業をやったのだと言っても「へえ、変わったことやったな」という感じで、「そりゃすごい」という反応ではなかったのです。石川県でいつも金森さんと研究活動をやっている教師でさえ、この授業の意義に気がつかなかったのです。僕は 89 年に着任したのですが、これは絶対に大事なテーマですから本にしましょうと言って作ったのがこの本です。これは今の泉澤さんの授業をやったときのテープ起こしや何かを全部入れました。

これは、まず小学校 3 年生の教室に、出産直前の学級のお母さんをゲストティーチャーに呼んで、実際に 3 年生の 10 月に学級の佐々木嘉子さんという子供の弟が生まれて、その赤ちゃんが教室に連れられてくるのです。4 年生のときには泉澤さん呼びました。3 年生のときには命が誕生する局面に子供たちを立ち合わせて、4 年生のときには末期の患者

のかたを呼んで、実際に5年生のときに泉澤さんが亡くなったので、クラスのみみなでお葬式に行きました。人生の始まりと終わりを提示することによって、子供たちに命を考えさせるという授業です。

僕は聞いたときにすごい授業が日本に現れたと思いました。従来の学校教育の社会とか理科とか、すぐに学校の先生は「何の教科でやったのですか」という質問をするのです。そんなのどうでもいいじゃないかと思うのですが、つまらない親などはすぐそういう質問をします。

末期患者と九死に一生を得た人、それから、肉親を亡くされた人、死に近い人ということで、3番めにいえば、愛する肉親を亡くされた人がいます。

実は去年、少年犯罪でお子さんを殺されたお母さんをゲストティーチャーとして金沢大学の授業でお呼びしました。そのときのこともやはりテレビになりましたので、それも見ていただこうと思います。

ビデオ上映

(久米宏) 「生きていたころよりも、もっと息子のことを思っているからです」。残された母親の言葉です。

(ナレーション) 自分の命より大切な息子を奪われた母。息子の供養のため、前を向いて歩こうとする力。息子の命が削られていくような厳しい現実。失った家族の魂へたどり着く、長い長い道のり。遺族はどうやって生きていくのでしょうか。

(久米宏) 去年の3月31日、滋賀県大津市で、体に障害を持つ16歳の少年がリンチを受けて殺されました。加害者は当時、15歳と17歳の少年でした。事件が起きたのは去年の3月31日。改正少年法が施行される前夜に起きた事件としてニュース・ステーションでも特集しました。事件からおよそ1年4か月がたちました。残された母親のその後です。

(ナレーション) 教員を目指す学生100人の中に、青木和代さんがいました。青木さんは去年、少年2人のリンチにより、息子の悠君を殺されました。講義のテーマは「命」。悠君の短い人生の紹介が始まりました。

(青木) 死に物狂いで勉強するからって、私に話しかけたのが最期になりました。

(ナレーション) 事件は滋賀県の大津市で起きました。当時 16 歳の青木悠君は知り合いの少年からカラオケに行こうと呼び出されました。左半身に障害を持つ悠君は、足を引きずりながら待ち合わせ場所の小学校に向かいました。恐ろしいリンチが待ち受けているとは夢にも思わずに。

暴行を加えたのは、悠君を呼び出した当時 15 歳の H 少年と、リーダー格で暴行の指示をした、当時 17 歳の S 少年です。青木さんは少年たちの供述調書を見て、残酷な事件の全容を知りました。

(青木) ここにバックドロップで 3 回も突き落とされているんですよ。

(津田ディレクター) ここの上じゃなくて。

(青木) 上から、落とされているんです。この下に。

(ナレーション) 少年らは、大学進学を目指していた悠君を、「障害者のくせに生意気」と 2 時間近くもリンチを加えました。暴行のあとは悠君を人目につかないように放置し、悠君が発見されたのは 2 時間後でした。

意識を取り戻すことがなかった悠君は、死の前日、一度だけ母親の呼びかけに答えました。

(青木) 私は、「悔しかったやろ」とか、「恐ろしかったやろ、母さん助けないでごめんね」って言ったら、流したんです、涙を。だから、すごい何か言いたかったのだと思うのですけれど。

(ナレーション) 逮捕された 2 人に対して、青木さんは厳罰を求めています。しかし、大津家庭裁判所は「内省力があり感受性も豊か」として、少年 2 人に刑事責任を問わない中等少年院に送致を決定しました。2 人の少年からは謝罪もなく、15 歳の H 少年が拘留中

に友人にあてた手紙には反省の色は見えませんでした。

(青木) 何で将来を奪った加害者に将来があるのかってというのは、本当に分からなかったですね。

(ナレーション) 青木さんは、息子と同じ年頃の学生たちに、残された者の心境を、そして少年法の矛盾について語りました。授業の最後にはこんな質問が出ました。

(学生) 悠君のためにどうやって生きられるつもりでいらっしゃるのか、ぜひお聞かせいただきたいと思います。

(青木) 本当に去年は訳も分からず、自分も被害者だという感じで、何かしていましたけれど、ずっと***生きられないようだったので、私が前向きに生きていくことで供養したいと思うし・・・(拍手)。

() ***なんですけど、心を動かされるというか・・・。

() 罪の重さに関して、ちゃんと法律で、それなりの法律で裁くべきだなと思いました。

ビデオ終了

これは去年の授業なので、事件自体はそのさらに2年前に起こったのです。青木和代さんは、少年法はもう廃止してほしいと言っています。つまり厳罰なんてものでは生ぬるくて、大人の犯罪であっても情状酌量の余地がある犯罪はたくさんあるし、少年の犯罪でも情状酌量の余地はない犯罪がたくさんあると。少年だからといって罰を科さないで一律に少年院送致にするというのはおかしいというので、少年法自体の廃止を要求しているところなどで講演をしてらっしゃいます。

それに関してはもちろん意見が賛否あると思いますし、僕もこの授業のときは教育学部の法律の若い先生に来てもらって、「佐藤先生、今の青木さんのご意見どう思いますか」と

振ってみたりしました。佐藤先生がおっしゃっていたのは、今、刑務所に収監された服役者の再犯率は50%近いのだそうです。だから刑務所に入れられても半数近くはもう一回罪を犯すというのです。ところが少年院に送致された少年の場合は、再犯率は30%ぐらいなのだそうです。30%を高いと見るか低いと見るかは分かりませんが、法律の専門家の間では、50%より30%のほうが低いわけだから、少年院による現行の更正制度はうまくいっているという評価です。学生たちは「ええっ」という感じでしたけれども、専門家はそう見ているのです。これはなかなか難しい問題です。

いずれにしても、そういう形で命のやりとりというか、死というものを経験したり、身をもって経験されているようなかたたちと子供たちが出会えるようなチャンスをたくさん作り出すことというのは、今の大人たちや学校教育の非常に大きな役割なのではないかと思っています。これが一つです。

動物以外の死という場合には、屠畜を体験する学習があります。つまり自分たちが「おかず」と称して毎日たくさん食べているものは、残して捨てるものも含めて、すべて命あるものだったということを実感するチャンスを子供たちに提供する。そのためには、実際に自分たちの手で食べ物となるものの命を奪って、料理して、全部感謝していただくというような試みをやはりやるしかないのではないかと思うのです。

末期患者を初めて教室に呼んだのは金森さんです。日本で初めて屠畜体験学習を組織したのは、実は歴史は非常に古いのですが、十分な記録が残っていません。関係者の口伝えで分かっているのは、1935年ぐらいから40年ぐらいまで、東京の自由学園というところで羽仁もと子という人が、そこで飼っていた豚を屠殺して、子供たちとみんなで食べるという取り組みをやっていたそうです。羽仁もと子さんの娘は羽仁説子で、その息子が羽仁進という映画監督、その娘が羽仁未央というタレントさんです。ですから羽仁未央からするとひいおばあさんになります。日本で初めての女性新聞記者で、ジャーナリストを辞めたあと、夫と共に自由学園という学校を作りました。今は東京の田無市、最近、西東京市という訳の分からない名前に変わったらしいですけど、そこにあって、今でもやっているそうです。屠畜自体は業者に任せているそうですけれども、今でも学校で飼っている豚を最後は屠殺してみんなで頂くという試みをやっているそうです。

戦後では、鳥山敏子さんというかたが「いのちに触れる」という授業の中で子供たちに実際に屠畜体験をさせています。今日、持ってきましたが、先ほど紹介していただいた『いのちを食べる私たち』という本の中で、子供たちのインタビューをしました。これは1980

年に小学校4年生、10歳だった子供たちに1999年から2000年にかけてインタビューしたものです。小学校4年生、10歳で実際にニワトリを殺して食べる授業を鳥山先生によって受けた子供たちが30歳ぐらいになったときに、その授業をどう評価しているかということを知りたくて、インタビューに基づいて書いた論文が中心になっています。

皆さん、やはり「得がたい体験をした」とか、すごく積極的に評価しておられました。以前、北海道でシャケが泳いでいる絵を書いてごらんと言ったら、魚の切り身が泳いでいる絵を描いた子供がいたという、うわさがまことしやかに語られて、本当かうそかよく分からない、神話のようになっていますが、「私たちは切り身で魚が泳いでいると思っているような、どういうふうに私たちは食べ物が作られているかを全く知らない世代だから、本当にいい体験をしたと思います」「普通に学校で飼っているように育てただけでは、単なる義務意識で全然実感できないけれど、やはり実際に殺して食べるという、命の重みがちゃんと10歳の子供ながら受け止めることができた」という意見が聞かれました。

それから、東京では部落問題はあまり話題になりませんが、関西出身の人に聞いてみると、部落差別に関する教育をものすごくしっかり受けてきています。今でも、もし日本人の中にそういう被差別部落の人たちに対する偏見があるとしたら、日本人全員が屠畜体験を一回やってみればいいのです。そうしたら、そういう差別も少しは減るのではないかということを受けた子供たち皆さんおっしゃっていました。

それまでは、僕も半信半疑というか、おっかなびっくりだったのですが、その鳥山敏子さんの教え子の聞き取りをして、これは絶対に今の子供たちに必要だなという確信を持ちました。

それで大学でやるようになったのですが、去年まで3年ほど、ずっと学生を集めて、ニワトリをやってみました。できるのがニワトリだけなのです。なぜかといいますと、豚と牛は素人がやってはいけないのです。屠畜場法という法律で、保健所の定期的な検査を受けている屠畜場以外で屠畜してはいけないというのが決まっているのです。屠畜場法の規制を受けない小動物というと、ニワトリとかウサギがありますが、ウサギを殺して食べたら、やはり子供は食べたことがないから「かわいそう」と言います。ふだん我々が食べているお肉、豚、牛、鶏のうち、豚、牛は屠畜定法で規制されていますから、できるのはニワトリだけなのです。ニワトリを殺して食べて「かわいそう」と言ったら、「あんた、ケンタッキーフライドチキンを食べたことあるやろ」と言えば、自分の言っていることがいかに矛盾に満ちたことかというのが小学生でもすぐ分かります。そういう意味では、ニワト

リというのはすごくいい教材だと思っています。

最初にやったときは、近江町市場のパーキングロの花屋さんの裏手、鳥由という鶏屋さんで、卵を産み終わった白色レグホンを最初1羽500円で譲っていただいて、やってみました。あそこは石川県の養鶏協会のアンテナショップにもなっています。しかし、硬くて食べられないのです。多分年配の人は懐かしい味だと思われたり、今のブロイラーは味がしなくおっしゃるのですが、今の我々はブロイラーしか食べたことがないですから、僕らにしてみると硬くて食べられませんでした。

学生も硬いと言っていましたので、やはり次はブロイラーでやろうと思って、今度は高松町のブロイラー工場に行きました。まさに工場です。本当に1日でもえさ代がかかったら赤字になりますから、少しでもえさ代が少なくて済むように、ブロイラーというのは短期で大きくなるように改良に改良を重ねた品種です。ものすごく大きいです。1羽1500円でしたけれども、3キロぐらいあります。

「うわあ、でかい。これは生後何日ぐらいですか」と聞いたら75日でした。「卵からかえって75日でこんなにでかくなるんですか?」と言ったら、「それがブロイラーという品種の特性なんです」とおっしゃっていました。ただただ人間に食べられるためだけに、75日間で大きくなるために改造されたサイボーグのような品種です。それで高松町で買ってきて、角間キャンパスに放したら歩かないのです。なぜ歩かないのかといたら、生まれたときから一歩も歩いたことがない。だから歩けないのです。「おまえ、もうすぐ食べられるんだから、せめて歩いておけよ」と言うのですけれども、歩かない。

殺すやり方はいろいろあるのですが、金森さんがクラスで「ニワトリを殺して食べる授業」を3月2日にやりました。NHKスペシャルの「涙と笑いのハッピークラス」という、日本賞を取った番組ではなんとカットされたのですが、そのときには、元農業高校の*白石*先生という方にコーチに来ていただきました。これは一人の子供が足と羽を押さえて、もう一人の子供が頸動脈を切断します。そうすると、血がコップに一杯ぐらい出るか、出ないか。ドクドク、ドバドバという感じではありません。テンポのいい、途切れないしづくという程度の放血を1分間ぐらいします。要するに、実際にブロイラーのお肉を生産するときに、養鶏場で機械でやるのと全く同じやり方を手作業でやっただけです。

実はおととしの11月に、秋田県の雄物川町で、小学校5年生に「ニワトリを殺して食べる授業」が計画されたのですが、心ない保護者の「残酷じゃないか」という投書で中止になってしまいました。私はその件が非常に気になったので、秋田に行って、実際にいろい

ろなマスコミの関係者のかたや、協力された農業高校の先生に取材をしました。岩波書店から出ている『世界』という雑誌に2002年6月号にそのルポを書いておきましたので、興味のあるかたはぜひ読んでください。秋田の細かい事実を全部調べて書きました。

本当にすごい先生でした。とにかく子供に一切強制しません。どうしても嫌だという子は、その場面を見ないで、農業高校で豚や牛を見学して、命を考えさせるということをやらせて、なぜそういうことをやるのかということは何回も話していましたが、保護者にも何回もそれを伝えていました。しかし一人だけ残念な保護者がいたのです。県の教育事務所に投書したのです。僕が大学でこれをやっているということは新聞で何回か報道されたのですが、その度に大学に「おまえなんて教育者の資格はない。おまえもニワトリと一緒に死んでしまえ」というようなすごい投書がたくさん来ます。なかなか分かっていただけなくて残念です。そのようなことを大学でやっています。

大体、時間になりました。どうもありがとうございました。

質疑応答

(質問者1) 結局人殺しなどで加害者になってしまう少年たちがいるわけですが、こういう人たちは命についてあまり考えていません。大阪で事件が起きましたが、あの人たちなども、結局は、刺したら死ぬのか実験をしてみたいとか、そんな動機です。そういうのを聞くと、小学校あるいは幼児、中学校の早い段階で、先生のおっしゃる命の教育をやるべきで、大学でやったのではもう遅いのではないかと思うのですが、その辺をどうお考えでしょうか。

(村井) 本当におっしゃるとおりだと思います。小学校3年生ぐらいから、子供たちの側からそういうことを知りたいという関心を少しずつ持ちだすのです。やはりそういうときのタイミングを逃さずに、その興味関心にこたえるということはすごく大事ではないかと思います。むしろ、中学校のときの命の問題は、性の問題がもっとメインになってくると思いますので、小学校の段階では、本当はこういう死の問題をむしろ素直に取り上げられると思います。やはり高校生、大学生ぐらいになると、かえって堅くなってしまいうか、そんなことを考えてもしかたがないという悪擦れというようなものが出てくるので、小学校の感性の柔軟なうちに、こういう授業に取り組むことが大事ではないかと思うので

すけれども、やはり今はなかなか難しい現実がありますね。

(質問者2) 最近、若い人たちが犯罪を起こすのですが、小動物を先に殺したことが殺人にまで至ったということは何回か聞きます。そういうことにつながらないようにするには、どのようにしたらいいですか。

(村井) これも鳥山先生の教え子のかたがおっしゃっていたのですが、ニワトリを殺して食べる授業の場合は、食べるために殺すわけです。遊びで殺すことと食べるために殺すことの違いが分かるという意味でも、食べるために殺してみることが大事だとおっしゃっていました。酒鬼薔薇少年や何かが、猫を殺したとか、いろいろなことを聞きますけれども、それは全部遊びですよ。金森さんなんか聞くと、子供のころいっぱい遊びでカエルを殺した、蛇を殺したと言っています。我々の世代は、そういうことが人を殺すことに結びつかないことをむしろ知っているとおっしゃっていました。現在の動物いじめはすごく都市的な文脈というか、自分が友人関係の中で孤立していることが動物虐待に向かうわけですね。だから動物にかかわった場面だけを取り上げるんじゃなくて、どういう動機で、どういう文脈でそういうことをするのか、その点を考えることが大事だと思います。

(質問者3) 私は子供たちの健全育成ということをやってきた一人です。ニワトリを殺して食べる、食べるために殺すということですが、先ほども小動物の話が出ましたが、例えばチューリップの球根をもらってきて植えさせる。ところがそういう生き物は必ず枯れて死んでいくわけです。私の家にも小さい犬がおりましたけれども、それは子供も大人もやはり悲しいものです。そういう体験というものを、小さいときから体験しようと思えばできるのではないかと思います。

アメリカでホームステイして感心したのは、子供たちに伝書バトを飼育させておりました。その家だけではなくて、かなりの家庭で生き物を飼育させる体験を非常に大事にしていることを見てきたわけです。それが今の日本の場合にはあまりにも少ないのではないかと思います。もちろん兄弟が少ないですから、上の者が下の者を慈しんで育てていく、親に協力をするということの体験も少ないわけですが、幼いときから、そういう体験を植物や動物の飼育を通してするのはいい機会ではないかと思っておりますが、いかがでしょうか。

(村井) おっしゃることに全く異論はありません。ただ、飼育も不足しているから飼育体験も増やさなければいけない。しかし、飼育だけではもう一步、まだ子供たちのいちばん肝心な命の感覚の歪みや揺れに届ききれていないのではないかという直感があって、鳥山先生などが一步踏み込まれたのだと思うのです。

その意味では飼育という体験が不足しているということ自体も、もちろん非常に問題ですし、実際に自分たちが食べるものを殺すという、食べるために動物が命を投げ出すという場面に出会っていないということの意味が、飼育一般で解消されるのか、それとも鳥山先生がおっしゃっているように、それには解消されない独自の意味として、やはりやらなければいけないのか、その辺はご意見が分かれる微妙なところではないかと思います。